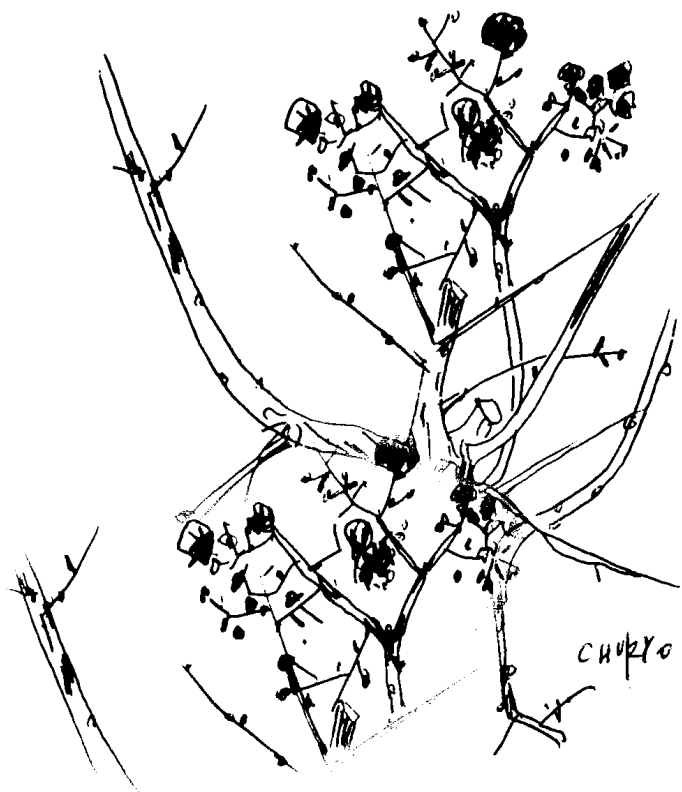


乃武子の災難

有馬頼義



講談社

乃武子の災難

昭和四十六年二月二十日 第一刷発行

著 者 有馬頼義

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二二

郵便番号 一一二

電話 東京(945)一一二一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定 価 四八〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© 有馬頼義 昭和四十六年

Printed in Japan

0093-148898-2253 (0) (文2)

乃武子の災難 目次

上京……………	セ
匂い……………	セ
枯死……………	元
驟雨……………	元
夏のはじめ……………	咒
第三の男……………	六
つぼみ……………	七
安楽死……………	八
油照り……………	三
揺れ動く乃武子……………	一〇三
白い映像……………	一四

蟬	二五
南方洋上	二六
九七〇ミリパール	二六
岩壁	二七
夜明けの教会	二六
雷雲	二九
儀式	二九
夕立ち	二〇一
求婚	二二
進展	二三
路	二三

装幀 佐藤忠良

乃武子の災難

上 京

浦山章という不可解な男の名前が、岩井乃武子の人生に、はじめてあらわれるまで、乃武子の学生生活には、何の波紋もなかったし、退屈で、平凡な日常がくり返されていたに過ぎない。

岩井乃武子は、郷里の福知山の高校を出ると、東京の大学を受験し、上京した。乃武子が受験した私立大学は、ちょっとおもむきがかわっていて、総合大学だが、沢山の音楽家を輩出していた。しかし、乃武子が、音楽家を志したと言っは、当たっていない。

乃武子の両親は、乃武子の中学時代に亡くなり、横浜の町医者にとついだ実姉が、乃武子の進学をすすめたのである。

その学校は東邦学園と言ひ、東京都内の仙川にあった。仙川というところは、まだそれほど開けてはいなかった。しかし、校舎は立派である。

しかし合格したとき、乃武子は迷った。横浜の姉の家から通うのには遠かった。それで、安いアパートをさがしはじめた。乃武子はまず、つてを求めて、やっと、荻窪にある、遠縁にあたる、竹村茂の経営するアパートをたずねた。

「いっぱいだね」と、中年の竹村は、気の毒そうに言った。「管理人室に同居してもいいが、子供がいるし、勉強は出来ないだろう」

「どんな部屋でも、物置きでもいいんです」

「物置きね……」

竹村は、ちょっと考える風になった。

「三階が屋根裏になっている。いろんな荷物がつまっているが、それを整理して、部屋に出来ないこともないが……」

「そこを貸して下さい。おねがいします」と乃武子は言った。

「ひどい部屋だね」と竹村は言った。「どうしても、ほかに部屋がないのなら、何とかして、安く貸して上げてもいい。しかし、天井もない。窓も一つしかない小さな部屋だ。見るかね？」

「ええ、見せて下さい」

そこは、まことに奇妙な部屋と言わなければならなかった。天井がないから、棟や、梁が、頭の上にあった。埃

で、それらは、黒くすすけていた。

小さなドアをくぐってはいると、埃の匂いが充満していた。しかし床はしっかりしている。その部屋には、居住者や、管理人自身のいらぬ道具類が、雑然と置いてあった。みんなどけてしまうと、それでもかなりの広さはありそうであった。

「朝、大学へ行って、帰って寝るだけなんです」と、乃武子は言った。

この部屋なら、部屋代も大したことはないに違いない。今のところ、学費と生活費の一部は、横浜の姉が出してくれることになっている。姉が、父から譲り受けたものの中に、郷里の山林が少しあったが、それは、義兄が病院を建てる資金にとっておかなければならない。

乃武子は、だから、その少女時代にも、特に貧乏したという経験はない。田舎では、上流階級に属していたといっている。しかし、何事もなかったとは言いがたい。小学校のとき、親しくつき合っていたのは貧乏な家に生まれた少年であった。何となく気が合って、登、下校も一緒だったし、学校でも、いつもくっついて遊んでいた。小学生同士の場合、家が貧しいとか富んでいるとかいう区別はあまりなかった。しかし乃武子は、一度だけ、奇妙な経験をしている。

全国の労働組合がストをやっていた。福知山では、その

影響は全くなかったのだが、少年は、少女を誘って、山へ行った。緑の草の上にねころんで、少年は、珍しく未来の話をした。

「おれ、どこかの工場にはいつて、労働組合で、ストライキをやるんだ」

「ストライキって、何よ」

「つまり、上の人の言うことをきかないんだ。大勢集まって、歌をうたって、電車も、汽車も、とめてしまうんだ」

「何の為に？」

「給料を上げろってことさ」

乃武子は女だから、少年のそういうあこがれに、少しも実感がわかなかったが、少年が、何かに強くひかれていることはわかった。

「でも、ずい分先のことね」

「ああ」

「中学、行くんでしょ」

「義務教育だからね」と少年はなまよきな言い方をした。

「高校は？」

「金があれば、行くさ。それから、アルバイトをしながら、大学へ行く。新聞配達でも、何でもやるさ」

「男の子っていいわね」

「どうして？」

「女の子って、親の言う通りにしていて、大きくなった

ら、お嫁に行くだけだわ」

「働いたっていいじゃないか」

「そうね」

「僕の友達の子で、――僕より年上だけど、工場へ行って、働いてるの、沢山いるよ」

「そう」

人間が働く、ということがどういふことなのか、実は、乃武子には、よくわかっていなかった。そういうことを考える必要が、全くなかったのだ。

ただ、乃武子を大学へやる、ということは、死んだ父親が始終言っていた。だから、大学へ行かなければならないのだ、と乃武子は思った。それだけの話に過ぎない。しかし少年と、そういう話をするとき、ちょっと羨しい気もした。男には、遠い将来に希望する何かがあった。それだけは感じたが、自分の未来とは何の関係もない。小学校を卒業したとき、少年は姿を消した。恐らく東京か大阪へ出て行ったのだろう。

実際に両親をなくして、大学の受験をしてみても、乃武子は、あの少年のことを思い出した。アパートだって、千円でも、五百円でも安い方がいいのだ。

「いつまでにあればいいかね？」と管理人は言った。

「早い方がいいんです」

「今は？」

「横浜の姉のところにいます。でも、大学まで、二時間もかかるんです」

「貸室ではないのだから、ただ、と言いたところだが……」

「いいえ。お金は払います。でも、安い方がいいんです」

「そうさな」と管理人は考え考えこう言った。「二週間後に越してきたまえ。古いものだが、ベッドが一つ、木のテーブルが一つ、ロッカーの古いのが一つ。それだけつけておこう」

「それで、おいくらですか？」

「水道もないしな。ま、月に千円ももらうか」

「結構です。水は、下へもらいに行きます」

「安くて、設備のいいアパートもあるのに、な」

「でも、たいいてい三千円から五千円はとりますわ」

「ことわっておくが、床には、水を流さないでほしい。下の部屋へもれると困るからね」

「はい」

「やかんも貸してやるよ」

「おねがいします」

一週間は少し長いように思われたが、どうせ間に日曜日の一つはいるから、大したことはない。

かつて、あの少年が将来の希望を持っていたことに対して羨望したが、自分が大学生になってみると、女でもやは

り、何やら野心のようなものが芽生えていることに気がついた。その具体的な一例として、アパート代を、少しでも安く、というふうなことがあったのだ。

横浜の姉の家へ戻ると、早速

「見つかった？」ときかれた。

「まあね。でも、ひどいところなの。それに、竹村さんて、ずい分、ケチなのね」

「どうして？」

「屋根裏の物置なのよ。それで月千円だって」

「へえ。世の中は様々ね。それでも、住むところがあって助かったと思わないの？」

「思うわよ」

「しかも、千円ぼっちで」

「それは、主観の相違だわ。あの部屋なら、ただでもいいのに」

「あんたの方がケチよ」

「そうかしら？」

「どうせ、ねるだけじゃないの？」

「それもそうだけど……」

「お金のことは、心配しないでいいのよ」

「心配していいと言うと嘘になるわね」

「無駄使いしなければ、それでいいのよ。あたしはまた、あんたが、一万円もするアパートを借りてくるかと思つて

た」

案外、姉の本心は、その辺にあったかも知れない。

内科、小児科、杉康彦。

表には、そういう看板がかけてあった。

「ここまでくるのには、たいへんだったのよ」と、姉は言つた。

「町医者でね、お金の儲かるのは、歯医者と、産婦人科よ。

はじめの頃、この辺に、五、六人、内科の人がいたわ。でも、もう半分は、婦人科と外科に転向したわ。うちの人は頑固なの。儲かるからと言って、闇で、中絶の手術なんかしたくない。子供をねらったのよ。その方が、幅の広い層をつかめる、と言つてね」

看護婦に困つたらしかった。少し居ても、すぐいなくなつてしまう。家の仕事は、姉の慶子がすべて一人できりしきつていたから、看護婦一人置けば、その分だけ主婦の仕事はふえる。しかし、最低二人はほしかった。ところが、二人そろつていた時期は、あまりない。月末から月始めにかけて、計算がたいへんであった。儲けが薄いのに、金の収支の事務的な仕事の量は、夫婦二人で徹夜をしても片付かない位である。それが、土曜や日曜にあたると、乃武子は手伝わされた。点数の計算がややこしい。どうして点数制になったのだろう。

義兄の話によれば、助かる病人も、保健があるために、

助からない場合があるという。病人を助けるためには、高価薬を使わなければならないが、それを始終やると、税金の面で帳尻が合わなくなる。杉康彦が、それでも一応繁昌しているのは、自分の手におえないと思うと、決断よく、近くの総合病院へ送り込むからだ。結局は責任のがれだが、そうでもしないと、あの医者にかかるのと死ぬ、という評判が立つ。町医者には、それが致命的であった。

生活保護法によって生活している独身者が病氣になったりすると、完全に医者への損である。高価薬や注射をしても、もとがとれない。そういう患者を、乃武子も一度見た。精神病と、老衰の両方で、死ぬことは目に見えていた。病人は、一日中、真夏でも、火鉢の灰をかきまわし、真綿のどてらを着ていた。冬もそうであった。勿論火鉢には炭はない。部屋の中は、鼠の巣であった。ひかりのない目をした老人の肩や背中を、猫位もある大きな鼠が走りまわった。乃武子は目をそむけた。

義兄の康彦は、しかしそれでも、その老人が死ぬまで、通った。

老人が死ぬと、誰かが来て、死体を引きとり、家はこわされ、その土地に、新しくアパートが建った。乃武子が受験のために上京し竹村のアパートを探すまでの短かい間の出来事であった。

約束の一週間目に、乃武子が荻窪の竹村のアパートへ行

くと、あるじは竹ぼうきで玄関を掃いていた。

「やあ、来たな」と竹村は言った。「部屋は空けてありますよ。かまわずあがって下さい。そして必要なものは、何でも言ってくれば、こっちで用意する。今日からするかね?」

「ええ。そうしたいんです。お金は用意して来ました」

「千円だと言った。敷金も礼金もぬきだ」

「それでいいんですか」

「いいよ。どうせ物置にしていた部屋だ。ああ、それから、今は陽気がいいが、あそこは、夏は暑いし、冬は寒いよ。そこまではめんどろをみないから、自分で考えて下さいよ」

「わかりました」

屋根裏の部屋へ行くと、結構使えそうな気がした。約束しただけの物は備えてあった。ベッドは、病院にあるような鉄パイプだったが、それ位は我慢しなければならぬ。何よりも、これで、自分一人の城を持ったという満足が、乃武子の心をひたした。身の回りのものは、スーツ・ケース一つにおさまっている。しかし洋服箱がないから、全部出しておくわけにはゆかない。

まず、ベッドに腰をかけてみた。わりに、いいスプリングであった。ベッドに腰をかけると、窓から、ちょうど、中央線の高架線を走る電車が見えた。音はしないから、かな

りの距離はあるのだろう。

竹村がやってきて

「どうかね？」ときいた。

「すみ心地がよさそうですわ」

「ま、人間て言う奴は、たいていの環境には順応する。これでも、馴れれば、都だ。毛布を持って来たよ」

「すみません」

「これから夏に向かうから、これでも寒くはないだろう」

「ええ。秋口になったら横浜の姉のところから、蒲団をかきてきます」

「部屋代のことだが、何も契約書をつくるほどのことでもないと思つてね」

「はい、千円」と、乃武子は、千円札を出して、竹村の掌の上に落とした。

「御恩は忘れません」

「なに、どうつていうことはないさ。しっかり勉強しなさいよ」

「ええ」

「毎月、月半ばに、下の管理入室へ、千円だけほうり込んでくればいい。私か、かみさんか、どっちかいるからね」

「奥様に御挨拶しなければ……」

「なに、奥様というほどのもんじゃないよ。顔の合ったついででいいさ。——外食かね？」と竹村はきいた。

「そのつもりです」

「この部屋には、ガスもひいてないからな」

「普通の貸室には、引いてあるんですか？」

乃武子は、ごく自然に、素朴な質問をしたつもりだったが、竹村は、目をバチバチさせた。

「何処にも引いてないさ」

「あら、そうですか」と、今度は乃武子の方がびっくりした。

「あんたは、ずい分、言いにくいことを平気で言うね。ガスは、各階に一つずつしかない」

「各階？」

「いや、各階と言っても二階しかないが……」

竹村のアパートは、よほど古いらしい。このあたりでは空襲がなかったもので、そういう大正期あたりの建物が、たくさんあった。千円の部屋では、文句も言えなかった。

「冬は、どうするんですか？」

乃武子は、二、三年前の冬に上京したときに見た、横浜の姉の家の診察室に、あかあかとともっていたガス・ストーブのことを思い出していた。

「火鉢か、石油ストーブか、練炭だよ」

「火事になると大変ですわね」

「いや、あんたがこの部屋に一人でとり残されては困るが、実を言うと、焼けた方がいいのさ。保険金で、新しい

アパートが建つ」

「火事になったら、どうしようかしら？」と乃武子は本当に心配になってきた。

「ロープを持ってきておくよ。窓からそれを下げて、おりるんだ」

「あたし、体育、だめなんです」

「大学や高校の体育と、火事と関係があるものか。非常べルは、あるからね。大丈夫だ」

心細い話、と言いかけて、乃武子は口をつぐんだ。千円だから仕方がない。しかし、アパートのあるじは、芯は親切でやさしいのだ、と思った。とも角当分は、ここで辛抱しなければ仕方がない。

その日は、大学へ行く必要がなかったので、部屋の中で、何処へ何を置くか、たのしみながら動かしてみた。少なくとも、確実にその部屋にあるものは、ベッドと、テーブル一つと、木の椅子一脚、洋服ダンスのかわりになるロッカーが一つ。それだけであつた。ものの配置といつても、大して考える必要はなかった。

乃武子は、スーツ・ケースの中身を、ロッカーに入れ、それを壁ぎわに押しつけてしまうと、もうすることがなかった。ベッドの毛布も、古いもので、布もかかっていない。ちょうど、顎のところへ毛布のけばけばが触れそうなので、タオルを一本無駄にして、それを毛布の襟のところ

へ縫いつけるために、針と糸をかりに、管理人室へ行つた。そのときはじめて、竹村の妻に逢つた。あいさうのないう中年の女で、することと言えば、子供を叱りつけることと、月に一度客室をまわつて、ようしゃなく部屋代を取り立てるだけのものであつた。

食事は、近所に、安い食堂があつた。戦争中の外食券食堂である。但し、時間を選んで行かないと、労働者がいっぱいいて、からかわれる。とも角、朝八時にアパートを出て、食堂へより、大学へ行く。大学には食堂があるから屋は困らない。夕方また食堂によつたり、友達と喫茶店によつたりして、六時頃アパートへ戻る。そういう日課が、きちんときまつた。土曜、日曜には横浜へ行く。義兄の医者には神経質だが、いい人であつた。とりあえず、渡る世間に鬼はない、という感じであつた。大学の図書館で時々新聞を見るが、それにはさざまなことが出ている。人殺したとか、未来の戦争だとか、――つまりその頃は、一九六五年の春。戦後二十年と言えば、食糧はもう充分にあつたし、金持ちと貧乏人の差はあまり目立たなかつたにしても世の中でかつて特に目立って繁昌していたのは、古物商と医者である。小さな構えではじまつたのが、半年のうちに大きな店にかわつた。医者は、診察室や待合室を急いで改造したり増設したりした。産科に転向した医者は、小さな診察室をこわして鉄筋のビルをこしらへたりした。

日曜日から土曜日まで、乃武子は、アパートの屋根裏の部屋にいた。全く、監理人の言う通り、その部屋に馴れ、馴れると、結構住み心地がよかった。第一ひとに干渉されない。そこでは、――入り口の扉に鍵をつけてもらったから、いつだって安心していられた。お金が少しはまったから、小さなアクセサリーか鏡台でも買おう、と乃武子は思っている。

夕方、部屋へ行こうとすると、竹村に呼びとめられた。

「あなたの部屋へ行ってもいいかね？」

「どうぞ」

「ちょっと相談したいことがあってね」

部屋には、椅子は一つしかないから、乃武子は、その椅子を管理人にすすめ、自分のベッドに腰をかけて、脚をぶらぶらさせた。

「何でしようか」

「いいにくいことだがね」

「はい」

「あなたは、この部屋を、夕方から朝までしか使っていない」

「ええ、そうです」

「土、日には横浜へ行くんだろう？」

「ええ」

「そうするとつまり、この部屋は、毎日半日と土、日はあ

いていることになる」

「そうなりますわね」

「そこで相談なんだが、その空いている時間を、ほかへ貸すことは考えられないかね？」

「貸す？」

「そうさ、つまり、あなたは千円払っている。部屋のあいっている時間よそへ貸して千円とれば、あなたの部屋代は、ただになる勘定だ」

「……………」

「実は」と管理人は言った。「私の甥が、住むところがないといって泣きついてきた。その男は、大学を出ているのに、どういう気持ちか、ちゃんと就職しないで、芝浦の倉庫で夜勤をしているんだよ。つまり、その男にとっては、朝から夕方まで眠るところがあればいいってことだ」

「……………」

「そこで、私はこの部屋のことを考えた。一つの部屋を、夜と昼と、二人が使う。それによって、あなたの部屋代が浮く。わたしは、もともと、この部屋から部屋代をとるつもりはなかった。あなたとも縁つづきだが、その男も甥だ」

「でも……………」

「ここんところが、かんじんだがね。つまり、その男と、あなたは、絶対に顔を合せないようにする。困るのはベッドだが、それだけは、自分のを片付けて出て行けばいい。